

札幌、
大学、
動物学教室

八田
先生

伊豆
投



第一



十月十日

大隈、東成郡墨江村山内田

三九六

高橋政和

之

大正 年 月 日

拝啓任後、益々勇健社為入、奉慶賀後、陳者勝本様、去七日
 夕刻、愈々衰々差出サレ候、六日迄ハ鳥居先生側ノ任打ニ慍馬
 タラズ、大ニ陣容ヲ整ヘテ、社運挽回ニ努メラレト、力瘤ヲ入シラレ
 シガ、先日來風邪ニ罹リ、發熱、ヨリテ咽喉ヲ痛メラレ、引續
 中、七日ニ至リ、階脱突併發、蛋白質ノ排出見テ發見シ、合室
 及合息ノ勸告ヲ、断然辭任ト決セラシタニ次第ニ候、

六月晚ニハ勝本様由父子ト面晤、其節勝本様ハ、竹内坂
 賣部（神戶支局長ニ左遷ノ事ヲ其坂ノ社長長及鳥居先生ニ対シテ主張セテタリトノ内話モ出テ、

後策ニ付凝議シタルモ、確定案ヲ得ルニ至ラズシテ御介シ致

大正 年 月 日

候、依テ私ハ夜中熟慮致候結果、竹内部長ノ後釜、御愛塔
 以外ニ、差當リ時局ヲ收拾スベキ適當ノ人ナラ、田中新治君ヲ補
 佐トシテ、及ハスナカウ吾々モ全力ヲ尽クシテ局ニ當ル積リテ、御
 愛塔ノ勝本様ノ令息タム点ニ於テ、猛席員堀ノ牧カハコト及
 ビ鳥居先生ノ苦手タム点ニ於テモ、社員トシテ出馬セラレバ勝
 本様モ大ニ御樂ニ成レルナルヘシ、且ワハ社内ノ空氣モ掃出來、狐
 輩ノ輩形ヲ潜メ候ハシ、此上ノ上策ハナカラシカト考ヘ、書面ニ認メ
 勝本様ノ手交仕候、(來客等ヲ慮リ)然ル處、ハ剛記ノ通ノ
 片病勢ニテ、一刀両断ノ處置ニ出ラレルモ仕候、
 勝本様肆任後ニ於ケル鳥居先生ノ態度(社ニ於ケル)ハ出凱旋

大正 年 月 日

將軍ノ態アリト認メテ、一社ヲ担当スルカ如キ氣概ニ、恩人ヲ
 失ヒ悔悟ノ念ニ若シマル、様ノ点ハ未タ見受ケ不申候、コレ頗ル遺
 憾トスル所ニ御座候、コレ々事實ニ立脚シテ断定セシ事ニ屬シ、
 御愛答トモ談合兩人認メテノ話ニ御座候、勝本郎ニ於テ鳥
 居先生ノ態度ハ社内ニ於ケルトハ、餘程徑庭アルヤニ聞及候ヘ
 トモ、私ノ与知セザル所ナレバ、必ズヤ御愛答ヨリ御報道ルコト
 ト信じ、一切想像ヲ交ヘザル趣旨ニ於テ不申上候、
 尚將來ヲ推及スルニ鳥居先生ト藤村社長トハ、必ズヤ葛藤
 ヲ生ズベク、其際ハ鳥居先生ノ憤懣トナリテ現ハレ、或ハ為メニ
 必躬境ニ陥ラレ、ニアラズヤ、其際ハ勝本様ハ一臂ノ力ヲ振テテ

大正 年 月 日

番政掬ニ當らんヤク、五右衛門驥尾ニ附、レテ微カヲ尽し度考、
 御座候、其時ヨソ初、勝本様ノ真ノ親切ヲ認メラル、カト
 考候、誠ニ血ノ筋ノ骨ニ至リ要スルニ、西宮鳥居先生ハ目下ノ處
 真ニ頼ムベキ者ヲ頼マス、随分ト擔ガレ居ん故、御氣毒
 ニ不堪、今ニ諺ニ云ス、離縁シタ女房ガ恋シクナル時節到
 来スベシト觀測致居候、

社長ハソノ人ヲ入レテ参リ、干渉ノ手ヲ伸ハシ来リ候、其入レ
 タル誰彼ハ皆イ、加減ナモノラレク呆レ居候、

今後ハソノ社ヲ食ヒ物ニスル(存リヒドイ意味ニマシ)疎放者
 流ト事務側トガ、衝突ヲ來スベク、勝本側ノ事務社員ハ切リニ

大正 年 月 日

辭意ヲ渡シ居ルモ引留居候、私ハ中々辭職ハ不致、社内ノ事情ヲ飽迄洞察置テ考ヘ候、

鳥居先生ハ常務辭任ヲ社内ニテ口ニセテ事一再ニシテ告ラザルモ、果シテ其真意ニ出ヅルヤ、又ヨシ真意ニ出ヅリトシテモ、重役會議ニテ辭任ヲ許可スルヤ否ヤ問題候、因ニ重役會議ハ來ル十六日キ之前十時東梅田本社樓上ニテ開會(十二日本社へ移轉)ト決定致候、

今回ノ勝本様ノ辭任ハ高等政策ヨリスレバ成功ト存候、社内ハ真ニ事務ノ才幹アル人ナシ、乱雜ヲ極メ新聞記事ガ、社會ノ期待ニ副_{ビ得ル}ルヤ否ヤ別トシテモ、營業上

大正 年 月 日

テハ、行程ノ失敗トナリ居ラセヤト考察致候、其繼續ヲ
北背ノ員ハセラレテハタマニテ、今カ引キ時トモ思ハレ候、

社長ハ来ルニキ重役會議ニ控テ、勝本様ノ辞任ヲ引留メ當

務ノ名義ヲ借りル方法ニ出ツルナラシ、コレ見エスキタル事ナリ、ソレ

ニ對シテハ御愛婿其衝ニ當ラシ、役割ニテ豫メ高守制シ

置クコトモ急ニテ、狡猾ナルモノニ對シテハ、狡猾言ハスル道ヲ以

テシ、御本人ハ病氣ナレバ不関言ヲキメラシ、計畫ニ候、

其後ノ経過略如此、右迄多ク申上候致具

八年十月十日 夜 控 勝本邸一 高橋政和 押上

八田先生

玉卓下